

明治天皇の道德思想に関する一考察

——日露戦争時の御製を中心に——

美和信夫

目次

- 一 はじめに
- 二 日本皇室伝統の「仁慈の精神」
- 三 日露戦争をめぐる「仁慈の精神」
- 四 戦争関係以外における「仁慈の精神」
- 五 おわりに

一、はじめに

広池千九郎⁽¹⁾は(一八六六一—一九三八年)、東洋法制史研究という明治時代の学会での新分野を開拓し、大正元年(一九一二年)に東京大学より法学博士の学位をあたえられた。しかし、その頃本人の内面に転機が生じ、その後道德の研究と実践に全力を傾注した。そして昭和三年(一九二八、六二歳)に、『新科学としてのモラロジ道德科学の論文』⁽²⁾を公刊し、新しい道德学つまり道德に関する科学的研究の分野を切り開いたとして、その研究内容をモラロジ—(道德科学)という名称で発表した。⁽³⁾

広池千九郎は、右著書の中で、日本皇室に継承されている道徳を、孔子・釈迦・イエス・キリスト・ソクラテスの各道徳系統と共に、世界史上における五つの優れた道徳（最高道徳）系統の一つと評価し、自己の道徳論の大きなよりどころにしている。

ところで、拙著『天皇研究』⁽⁵⁾では、日本皇室の特質として、①祭祀の世襲、②人格の涵養、③仁慈の精神、④公平無私の精神、⑤自己反省の精神、の五点をあげた。

また拙論「明治天皇と日本の近代化について」⁽⁶⁾では、明治天皇研究の重要性、日本の近代化において明治天皇の果たした足跡、さらに世界諸国で明治天皇が高く評価されてきたことなどを考察した。たとえば、明治天皇没時、イギリス、フランスなど世界各国の新聞等が、その業績や人間性を絶賛したことなどを例示した。なおソビエト、ポーランドを含めた、現代世界の代表的な百科事典十五種類に取り上げられている日本史上の人物をみると、十五種類とも取り上げているのは明治天皇のみという。⁽⁸⁾

その明治天皇の生涯⁽⁹⁾（一八五二―一九二二年）において、明治三十七年から明治三十八年（一九〇四―一九〇五、五三歳―五四歳）にかけての日露戦争こそは、当時の日本の運命を左右するほどの世界的な大事件であり、もつとも苦しい試練だったといわれている。⁽¹⁰⁾

本論は、そうした日露戦争時を中心に、日本皇室の伝統的精神である「仁慈の精神」⁽¹¹⁾が、具体的にどのようなあらわれているのかを、明治天皇の書き残された唯一の資料だといわれている御製（和歌）⁽¹²⁾をもとにしながら、他の資料も交えて検討し、明治天皇の道徳思想の一端を考察することを目的としている。

なお筆者は、明治天皇研究において、何よりも、書き残された約十万首の御製の資料的価値を重視する理由を、前記拙論で言及した。この点について、さらに日本近代史の研究家福地重孝氏も、「和歌に示された天皇の意志

は、法律以上に国民の心をとらえたのであった」と述べ、その御製に着目していることを付け加えておく。⁽¹⁴⁾

二、日本皇室伝統の「仁慈の精神」

(1) 国民一人ひとりの生活の安泰を切に願う

① 事あるにつけていよいよ思ふかな

民のかまどの煙いかにと（明治37年）

② 國民のうへやすかれとおもふのみ

わが世にたえぬ思なりけり（明治38年）

第十六代仁徳天皇が国民の生活の安泰を願って、民のかまどの煙の様子をみて、人々の生活の苦難を感じとり、租税を免除したという有名な事蹟が伝えられている。右①の御製はそうした皇室の伝統が歴代天皇に受け継がれてきていることを示している。⁽¹⁵⁾そして明治天皇ほど、歴代天皇のなかで、日本のすみずみまで旅行し、国民の生活ぶりを知悉した天皇はなかったであろうといわれている。⁽¹⁶⁾それは右①の御製が示すような気持ちで、実際の行動において具現されたものと考えられる。

つぎに明治天皇は、立憲君主制のもとでの政治的配慮から、個人的感情の発露を極度におさえ、天皇としての立場を自覚されていたという。⁽¹⁹⁾しかし、明治天皇がもつとも重んじられたのは、「国民本位の政治」という考へ方であった。それは国民の幸福進歩と国家の隆盛発展をこいねがうことであったが、それが両者別々ではなく一体のものとして、いつも明治天皇の念頭にあったという。⁽²⁰⁾右①②の御製はその心情を伝えるもので、しかもこうした国民の生活の安泰・幸福を念ずる「仁慈の精神」は日本皇室の伝統として伝えられていた。この日

本皇室の伝統的精神について、肥後和男氏はつぎのように述べている。

「天皇は多くの場合伝統と理想の統一されたものとして存在していた。国家の統一も文化の発展も国民は天皇にその理想を見、また憧憬の対象となっていた。いかなる時代においても国民の念願することは「安国と平らけく」治まる時世を念願したのであって、今日の言葉でいえば、平和国家、文化国家の建設を民族の理想としていたのであって、「安国」の実現のために祖先に祈り、祖先の示した徳行は、遺傳的勢力として代々の天皇に伝えられ、天皇はその民族理想の実践者と考えられ、そこに天皇に対する崇拜も起り、国民との対立はなく天皇自身民族の理想の保持者となって歴史をつらぬいて生きてきたということが明らかである。天皇の名によって発せられた詔勅、和歌、日記、著述などに一貫してあらわれるものは、天皇は神と共にあり、国民と共にありということであって、神慮を天皇の思いとし、国民の思いを天皇の思いとする一種の宗教者として、過去においても天皇はまさしく日本民族結合の象徴であった」

(2) 世界平和が何よりの喜び

① 國ごとにくにをまもりてよもの海

しづかなる世ぞうれしかりける⁽²⁵⁾ (明治36年)

② 四方の海しづかなる日にあへる世は

こころにおもふことなかりけり⁽²⁶⁾ (明治45年)

国民一人ひとりの生活が安泰であるためには、何よりも世界全体が平和であることが重要な要素である。そうでないと、様々な点から日本人の生活に不安を与えかねない。したがって、右①②の御製に現れているように、明治天皇は、日本の四海を中心に、世界諸國が波静かで平和であることを何よりも喜びとされている。事

実、明治天皇について、徳富蘇峰氏は「本来の平和愛好者」、渡辺幾治郎氏は「明治天皇は誰にもまして平和主義者であらせられたと拝察する」、福地重孝氏は「平和を愛し、人類愛にとんだ」天皇、とそれぞれ評している。たとえば、日露戦争よりも十年前に起きた日清戦争時においても、明治天皇は、平和のために、何とかして戦争を避けたいと考えておられたという⁽²⁷⁾。

(3) 諸外国との友好親善を願う

① まじはりをむすぶ國國へだてなく

したしまばやおもふなりけり⁽²⁸⁾ (明治38年)

② まじはりをむすびかはして四方の海

なみたたぬ世ぞうれしかりける⁽²⁹⁾ (明治39年)

右①②の御製は、我が日本をはじめ世界諸國が平和であるためには、日本が率先して世界諸國と真の友好親善関係を保つことが大切であることを認識し、それを心より願う明治天皇の心情が吐露されている。

外国との関係で明治天皇が非常に苦しい思いをされたことの一つが、日清戦争後のいわゆる「三国干渉」であった。日清戦争後の講和条約によって、遼東半島は日本の領有と定められた。しかるにその直後、ロシア・ドイツ・フランスの三国は日本に対して遼東半島を放棄するよう要求し、日本はやむなく涙をのんで、その申し出に従ったのである。戦勝に酔っていた日本国民に対して、明治天皇は、この事を勅語にして伝えられたが、その文書中に、天皇は、あえてこれら三国を「友邦」「友誼」とよんでおられるのである。明治天皇が日本国民の意向に対しての非常に苦しい感情を押え、あえて諸外国との平和と友好親善という立場から、この言葉が発せられたものと考えられる⁽³⁰⁾。

(4) 友好親善は誠実な心が基である

- ① はらからのむつびをなしてまじはらば
とづくに人もへだてざるらむ⁽³¹⁾ (明治37年)
- ② まことあるころを人にしめしてむ⁽³²⁾
まぢはりむすぶ國のはてまで⁽³²⁾ (明治43年)

誠実な心とは、古神道のいわゆる「清明心」の流れを受け継ぎ、その後の日本人に一貫して重視され、継承されてきた道徳的精神であると考える⁽³³⁾。しかも、その表現方法は異なっても、その心は、日本人のみならず世界諸国の人々にも、共通普遍的に重視されてきた道義心であると考えられる⁽³⁴⁾。

右①②の御製は、世界諸国との平和友好親善のためには、まずわれわれ日本人一人ひとり自らが誠実の心を基本として、どの国の人々とも交流していくことの大切さを吐露されたものといえよう。

(5) 隣国など諸外国の安泰も願う

- ① へだてなくしたしむ世こそうれしけれ
となりのくにもことあらずして⁽³⁵⁾ (明治40年)
- ② おのづからおのがころもやすからず
隣の國のさわがしき世は⁽³⁶⁾ (明治45年)

日本国家が平和であり、日本国民が安泰な生活を営むためには、日本の外交のあり方のみならず、諸外国、特に近隣諸国内の政治的・経済的情勢なども影響する。たとえば、日清戦争の発端の一因が隣国朝鮮国内の政治的対立にあり、それへの日清両国の干渉などによって、ついに日清両国が開戦したことは、つとに知られて

いる⁽³⁷⁾。

したがって、右①②の御製は、そうした考えと配慮とを示されたものと思われ、注目される。

三、日露戦争をめぐる「仁慈の精神」

(1) 戦争回避が最大の願い

- ① 民草のうへやすかれといゆる世に⁽³⁸⁾
思はぬことのおこりけるかな⁽³⁸⁾ (明治37年)
- ② よもの海みなはらからと思ふ世に⁽³⁹⁾
など波風のたちさわぐらむ⁽³⁹⁾ (明治37年)

前述したように、歴代天皇と同様、明治天皇は、国民一人ひとりの平安と幸福を願っておられた。そのために、そうした国民生活を乱す最大の要因となる戦争を何よりも避けたいと考えておられた。右①②の御製からは、諸般の情勢から日露戦争突入やむなしの雰囲気の中で、明治天皇が最後まで開戦を避けたいという強い念を持たれていたことがうかがうことができる。

当時、内村鑑三のように、国民の一部には「非戦論」もあったが、国民世論は「開戦論」が圧倒的大勢だった。しかし、政府関係者は、日本の実情を認識しておおむね慎重論であり、強国ロシアと戦うことを大いにためらっていたが、最後には「やむなし」となって開戦に踏み切ったのである⁽⁴⁰⁾。

ところで、明治天皇は「戦争には本能的な aversion (嫌悪) をもっておられた」という⁽⁴¹⁾。だから日露戦争時には、「元老会議で決議したのに、まだ開戦の聖断のしらなかつたのは、内心、如何にロシア相手の戦争は、でき

る限り避けたいとの軫念が強かったかを物語る」という。そして日露戦争開戦決定の御前会議後、明治天皇は皇后に対して、「いよいよロシアと国交断絶と決まった。これは朕の志ではないが、いかにもやむをえぬことだ」「もし、これで負けることがあったら、祖宗に対しても国民に対しても申しわけのないことになる」と暗い表情をしておられたという。こうした点からも、右の御製が明治天皇の真情であったことが首肯できよう。

なお、右御製②にまつわるつぎのような逸話が伝えられている。
「アーサー・ロイドによる右の御製の英訳を、シオドア・ルーズベルト大統領（米国）が読んで、大へん共鳴し、日露戦争講和の斡旋を買って出たというのは有名な話です」

この逸話からも、右②の御製などにあらわれている、明治天皇の精神・人間性は欧米の人々にも感銘を与えるものであったことがわかる。

(2) 国民が一体となって国を守ることを願う

① かの實のひとつ心に萬民

まもるがうれし蘆原のくに（明治37年）

② あた波のさわきがちなる世にしあれば

みなとのそなへおろそかにすな（明治38年）

右①②の御製には、祖宗から受け継いできた日本のためにも、また国民の安泰のためにも、心を一にして万に備え、国を守っていくことをおろそかにすまいという明治天皇の責任感が吐露されていると思われる。

だいたい明治時代において、諸対立を一つにまとめ治めて、日本が近代化へ進みえたのも、「明治天皇の羽翼下であればこそ」だという評価もされている。

(3) 国のため国民と一体となって戦勝を願う

① 國をおもふみちにふたつはなかりけり

軍の場にたつもたたぬも（明治37年）

② 暑しともいはれざりけり戦の

場にあけくれたつ人おもへば（明治38年）

右①②の御製は、苦悩の末に国運をかけて開戦に踏み切った以上、戦場で戦っている人々や苦しい生活に堪えている人々と一体となって、自らも戦場にある人と同じような苦難を背負い、日露戦争の勝利を願う明治天皇の心情が吐露されている。

明治天皇は、明治三十七年二月の開戦と同時に御座所のストーブを焚くことをおやめになったり、また出征兵士の寒暑困苦を思っ、夏服一着の軍服生活で通されたりして、戦場にある兵士の労苦を自らも担われたといふ。

(4) 戦争のゆくえをいつも気遣う

① さ夜ふかくゆめをさましてさらにまた

軍のうへをおもひつづけぬ（明治37年）

② さまざまにも思ひこしふたとせば

あまたの年を経しこちする（明治38年）

右①②の御製も、前項で述べたように、戦争のゆくえをいつも気遣う明治天皇の心労ぶりをうかがうことができよう。

明治天皇は、責任感の極めて強いお人柄であり、開戦後旅順攻撃などの苦しい戦況が気になって、眠れない毎夜をすごされたという⁽⁵³⁾。しかし明治天皇は、他方では、旅順攻撃での苦戦や日本海海戦での勝利などに一喜一憂したり、感情的に動かされるといような姿を見せる事なく、いつも冷静・沈着、泰然自若として、王者たる態度を示されていたという⁽⁵⁴⁾。

(5) 戦場にいる人々の苦難に胸が痛む

- ① いくさ人いかなる野べにあかすらむ
蚊のこゑしげくなれるこの夜を⁽⁵⁵⁾ (明治37年)
- ② はからずも夜をふかしけりくこのため
身をすてたりし人をかぞへて⁽⁵⁶⁾ (明治37年)

右①②の御製からは、日露戦争時に、もつとも苦難をなめた戦場の人々の身のうえを思って、明治天皇自身が日夜こころを痛めておられた様子をうかがうことができよう。そして(3)(4)(5)の項の御製などからもうかがわれるように、日露戦争時におけることのほかの無理が、ついに明治天皇の健康にすくなくならず影響し、死期をはやめることになったといわれている⁽⁵⁷⁾。

(6) 戦場で倒れた人の身の上をまず氣遣う

- ① 國のためたふれし人を惜むにも
思ふはおやのころなりけり⁽⁵⁸⁾ (明治37年)
- ② いさをたてしいくさの人をみるにまつ
歸らずなりし身を思ふかな⁽⁵⁹⁾ (明治39年)

前項では、戦地へ出陣した兵士への「仁慈の精神」の一端を紹介した。ところで、戦争でもつとも悲しく悲惨なことは多数の戦死者が出ることである。右①の御製では、戦場で倒れた人を惜しむとともに、その親の悲しみが一層深いことに思いをいたし、②の御製では、戦功によって称賛される人を見るにつけ、その蔭には、戦死などによって帰国できなかった人々の身のうえを思って、その人々への無念に思いをはせる、明治天皇の「仁慈の精神」の姿をうかがうことができよう。

(7) 戦争相手国の人への思いやり

- ① 國のためあたなす仇はくたくとも
いつくしむべきことな忘れそ⁽⁶⁰⁾ (明治37年)
- ② わが國にあたなす人もぬかづきて
したがふみればあはれなりけり⁽⁶¹⁾ (明治39年)

右①②の御製は、戦争相手国であったロシア兵士に対する「仁慈の精神」のあらわれである。徳富蘆花がロシアの文豪トルストイを尋ねたときに、明治天皇が平和を愛されたという話⁽⁶²⁾から、特に①の御製を示した。すると戦争絶対否定のトルストイは、「これは明らかに矛盾である。敵を打ちくたくことと、いつくしむことと、調和ができるか」と反問したという⁽⁶³⁾。

しかし、日露戦争時には、この明治天皇の気持ちだが、日本側兵士の具体的行動などにも反映したのではないか。たとえば、非常な犠牲のすえに旅順を陥落させた後、降伏した旅順守備隊長ステッセル將軍に対してとつた乃木將軍の人道的態度は、内外の記者たちを通して世界の人々を感動させたといわれている⁽⁶⁴⁾。また、ロシア兵捕虜に対する日本人全体の人道的配慮も内外の人々に知られた事実である⁽⁶⁵⁾。さらにまた、日清戦争時でも、

皇后が、日本人の傷病兵を慰問されたのみでなく、清国兵の捕虜へも言葉をかけられたというが、日露戦争時にも負傷者に下賜された義眼・義肢を、捕虜として収容した敵国兵士にも下賜せよとの御沙汰があったという。⁽⁶⁶⁾ こうした日本人の態度・配慮は、当時、日本・日本人の道義心に対する欧米人の高い評価となって、日露戦争後の不平等条約是正への一因となるなど、日本の国際的評価を高めることになったと考えられる。たとえば、右①の御製は、トルストイは矛盾だと語ったというが、(1)の②の御製以上に、明治天皇の人道主義のあらわれとして、当時内外から高く評価されたという。⁽⁶⁶⁾

(8) 戦争の早期終結を願う

① 思ふことつらぬきはてて國民の

心やすめむときぞまたるる⁽⁶⁷⁾ (明治37年)

② むかしよりためしまれなる戦に

おほくの人をうしなひにけり⁽⁶⁸⁾ (明治38年)

右①②の御製は、明治天皇が開戦早々から日露戦争を一日も早く終結し、犠牲者の少なからんことを念願しておられた心情をうかがうことができよう。

陸の奉天会戦にひきつづいて、海の日本海海戦の勝利は、日露戦争の戦局の状況をほとんど決定的にした。日本政府は明治天皇の親裁を仰いで、アメリカ大統領ルーズベルトの講和提議を受諾したのである。当時、わが国民の意気は大いにあがっていた。それで講和会議などはまだ時期尚早とし、ハルピン、ウラジオストックなどを攻略して、ロシア兵をバイカル湖畔にまで駆逐すべしなどと、気炎をあげる者もあったという。⁽⁶⁹⁾

しかし、明治天皇は、交戦すでに一年数か月にわたり、戦禍のますます拡大することを憂慮されていた。そ

して平和と人道のため、右①②の御製などによって、一日もはやい講和を願っている気持ちを示されている。また、講和会議が決裂しそうになった折りに、「この際は、平和を望まれる天皇の思し召しを体し、また、諸般の情勢からみても、講和条約の締結を期するべきである」という、日本政府の回答を得て、小村寿太郎代表らの全権一行は、ポーツマス講和会議の妥結に達することができたのである。⁽⁷⁰⁾

四、戦争関係以外における「仁慈の精神」

(1) 国のために尽くした人々への思いやり

① 萬代もふみのうへにぞのこさせむ

國につくしし臣の子の名は⁽⁷¹⁾ (明治38年)

② 老いぬれど國の力とならむ人

すくよかにこそあらまほしけれ⁽⁷²⁾ (明治42年)

右①の御製は、特に国家・国民のために尽くした功労者の子孫を、いつまでも忘れないようにしていきたいという気持ち、②の御製は、国家・国民の力となるべき人々が、老いても元気でいてほしいという願いを示されたものであろう。そしていづれも、国家・国民のために、国民と一体となって努力された明治天皇の仁慈の一端をうかがうことができると考える。

(2) 国のために尽くした高齢者への思いやり

① 國のため千千の功をつみたりし

老のこころをなぐさめやらむ⁽⁷³⁾ (明治39年)

② 國のためいさをたてし老人の

さかゆくみればうれしかりけり(明治40年)

右①②の御製は、国家・国民のために尽くしてきた高齢の功労者をいたわる心情と、そうした功労者が高齢となっても、なお元気で活躍している姿をみて、無上の喜びとする心情とを詠まれたもので、やはり明治天皇の仁慈の一端をうかがうことができよう。

(3) 高齢者への思いやり

① 世わたりのことしげくとも老人を

たすけむわざに心たゆむな(明治37年)

② をさな子にひとしくなれる老人を

いたはることをゆるがせにすな(明治43年)

右①の御製は、どんなに忙しい生活をしていても、高齢者の身上を忘れずいつでも手助けしようとする心がけを、国民一人ひとり持ち続けるよう願って詠まれたものと考えられる。また②の御製は、誰でもいつかは高齢者となるだけに、高齢者をいつもいたわる心をゆるがせにしないでほしい、という気持ちを詠まれたもので、明治天皇の老人への慈しみの心の一端を示すものと考えられる。

(4) 一視同仁の心づかい

① 夜をさむみねざめの床におもふかな

雪にうもれし里はいかにと(明治35年)

② 位山たかねのみかは野べになつ

民は民なるものおもふらむ(明治38年)

『広辞苑』(岩波書店)によれば、「一視同仁」とは、中国古典に由来する言葉で、「親疎の差別をせずに、一様に仁愛を施すこと」とある。つまり一視同仁の心とは、あらゆる民族、あらゆる人々を公平・平等に愛する慈悲心といえるのではないか。

前述したように、天皇は日本国民一人ひとりの生活の安泰・幸福を願う立場にある。そして明治天皇の右①②の御製からは、高い地位をえて国家・社会に尽くしている人だけでなく、目立たないところで苦勞していたり、恵まれない境遇にあったりする人々に、より強く思いをよせ、日本国民全体が同じように幸せであってほしいという、明治天皇の気持ちがあがわれよう。そうした一視同仁の心を持つように努めておられた明治天皇の印象について、つぎのような事実が伝えられている。

明治四十年に來日し、はじめて明治天皇に会った救世軍創始者ブース大將は、その時の印象を本国の孫たちに

「明治天皇にお目にかかった。はじめのうちはいかにも剛毅果斷のお方のようにおみうけた。しかし、やがてそのうちに、たいへんお情けぶかい慈悲心に富んでおられる方だということがわかってきた」

と書き送っているという。そしてブース大將にかぎらず、晩年の明治天皇に会った人たちは誰でも、威あつて猛くない、慈悲の心にみちたおらかな、いかにも王者らしい風格に接して感激したといわれる。

(5) 指導的立場の人は特に慈しみの心が大切

① 石ばしら高き家ゐに住む人も

貧しき民のうへなわすれそ(明治38年)

② 千萬の民の心をささむるも

いつくしみこそもとるなりけれ(明治43年)

前項で述べたように、晩年の明治天皇は王者らしい風格を備え、慈悲心にみちた方と評されている。しかし、幼少の頃の明治天皇は、激情しやすかったり、あきつぽかったりする面も多かったともいわれている。だから生まれながらに帝王の性格を完備されていたわけではない。だから累代の素質や侍講などによる帝王学教育に加えて、明治天皇自身のたえない努力の積み重ねによって、後年の明治天皇は、名実ともに王者とよばれるにふさわしい風格を備えていかれたものと考えられる。筑波常治氏は、「その(まだ未熟な)少年がすぐれた指導者へと成長してゆく努力のあとこそ、明治天皇のえらさであり、評価されるべき事実であろう」と述べている。

右①②の御製は、明治天皇とともに、日本の近代化に尽くした指導的立場にあった人々にも、前項で述べたような、苦勞にたえたり、恵まれなかつたりする人たちのことをまず念頭において、いつも慈しみの心を根本として努力していつてほしいという明治天皇の思いが詠まれていると考える。

(6) 譲りあいの心づかい

① 小山田の畔のほそ道細けれど

ゆづりあひてぞしづは通へる(明治39年)

右①の御製には、お互いに譲りあいの心、協調していく心を持つことが大切だという明治天皇の心情が詠まれていると考えられる。

たとえば、抗争をきらい、調和を望むのが明治天皇その人の意志であることは、薩長閥の人々と岩倉具視ら

が、大隈重信参議を政府から追放したいわゆる「明治十四年の政変」において、すでにはっきりしめされたという。のちに大隈はみずから菅原道真にたとえ、あのととき明治天皇がおられなかつたならば、無事に生命をまっとうしえたかどうかもわからない、と述懐したという。そして彼はいったん要職を追われたものの、逆賊とか謀叛人とかの汚名を着せられることなく、政治的生命をながらえて、数年後にふたたび政権の座へ返り咲いている。筑波常治氏は、この事件を通じて明治天皇が、抗争の調停者として、国家統一に努力する態度をあらわにしたといえる、と評している。

(7) 仁草木におよぶ

① をさめしる國のためにとおもふこと

木にも草にもある世なりけり(明治43年)

② 花になり實になるみれば草も木も

なべてつとめのある世なりけり(明治43年)

右①②の御製は、この世に生命をうけた以上、草木にもそれぞれこの宇宙自然界の一員として役立つべきつとめをもっている。したがって、私達は草木や動物など自然界に対しても「仁慈の精神」で接することが大切であるという、明治天皇の心情を示されたものと考えられる。

そしてさらに右の事から、ましてやこの世に生をえた我々人間一人ひとりに無駄な人はいないわけであって、その人その人の長所・本分を生かし、草木と同様に、国家・社会の一員として役立つべき使命のあることを示唆されているのではないか。

五、おわりに

前項までで述べたように、明治天皇の生涯は、日本皇室の伝統である「仁慈の精神」で努力された一生といえるであろう。

ところで、明治天皇は日本の元首であった。補佐する大臣以下の人たちはそれぞれいても、国の歩みに関する最終的な責任は、天皇ひとりでおこななければならなかった。天皇は、誰かを身代わりにたのみ、立場をかわってもらうわけにはいかない。どんな場合でも、やめることも逃げることもできない。それは究極において、他人に頼ることのできない地位であった。

つぎの①の御製は、そういう自己の立場を十分に自覚し、何事においてもまず自己をかえりみて最善を尽くすよう努力されていた明治天皇の心情をうかがうことができる。

① ひとり身をかへりみるかなまつりごと

たすくる人はあまたあれども（明治36年）

明治天皇も、また人間である以上、たとえ最善だと考えて行なったことであっても、予期通りに事がはこばなかったり、あるいは補佐すべき人達が対立して政局が混乱したりすることもあった。だから明治天皇は、一人の人間として自己の力量の限界を十分自覚するとともに、その上で究極の地位である天皇として最善を尽くそうとされていたのではないか。つぎの②③の御製は、いつも「仁慈の精神」で努めながらも、それでもなお自己のいられないことを自覚し、何事においてもまず自己に反省される天皇の心情を伝えている。

② 世の中をおもふたびに おもふかな

わがあやまちのありやいかにと（明治40年）

③ 天をうらみ人をとがむることもあらじ

わがあやまちをおもひかへさば（明治42年）

前項までに述べてきた「仁慈の精神」に加えて、この「自己反省の精神」こそ日本皇室の伝統的道德の真髄といえるのではあるまいか。

注

- (1) 法学博士広池千九郎の生涯については、つぎのような文献がある。山田孝雄編『近代日本の倫理思想』大明堂、昭和五六年。中村元他監修『近代日本哲学思想家辞典』東京書籍、昭和五七年。中村元著『比較思想の先駆者たち』広池学園出版部、昭和五七年。横山良吉著『広池千九郎先生小伝』広池学園出版部、昭和五六年改訂版。モラロジー研究所編『資料が広池千九郎先生の歩み』広池学園出版部、昭和五七年改訂版。なおその他、広池学園出版部からは、広池千九郎に関する文献が多数出版されている。
- (2) 初版は全四冊。現在は新版が全九冊の予定で広池学園出版部より刊行中。
- (3) 水野治太郎「モラロジー研究の現状と課題」（『モラロジー研究』NO.1、モラロジー研究所、一九七三年。また、道徳に関する現代思想の動向と対比しながら、広池千九郎の発表したモラロジー及びそこで提唱している「最高道徳」の特色とその意義の一端を考察した、拙論「現代思想とモラロジーに関する一考察」（『モラロジー研究』NO.19、広池学園出版部、一九八五年）も参照されたい。
- (4) 広池千九郎は、世界における最高道徳の五大系統として、日本皇室の他につきの四系統をあげている。すなわち、第一はギリシアのソクラテスを祖とする道徳系統、第二はユダヤのイエス・キリストを祖とする道徳系統、第三はインドの釈迦を祖とする道徳系統、第四は中国の孔子を祖とする道徳系統である。

(5) 広池学園出版部、昭和五六年。特に第二章を参照。

(6) 『麗澤大学紀要』第四十一巻、昭和六一年三月。

(7) 小西四郎編『明治のいな手』下(人物・日本の歴史 第十二巻)においても、「明治の指導的政治家の背後に、明治天皇が厳としてあったことは政治史研究のうえでも見落とせないことであろう」と述べている(読売新聞社、昭和四八年、二九二頁)。

(8) 所功著『日本の祝祭日』(二十一世紀図書館)PHP研究所、一九八六年、一二二頁。なお、明治天皇は人間形成の事例としても注目に値するという(渡辺茂雄著『明治天皇』時事通信社、昭和四一年、「まえがき」)。

(9) 明治天皇の生涯を、ドナルド・キーン氏はつぎのように述べている。「ビクトリア女王は十八歳で即位したが、明治天皇は即位のとき十五歳にすぎなかった。しかも、当時の日本の置かれた状況は、ビクトリア朝初頭のそれに比べると、まさに狂瀾怒涛だった。天皇は、一日も早く一人前のおとなに成長しなければならなかった。そして、彼の治世の間に日本が体験した変動は、いかなるヨーロッパの君主も知らないほど激しかった。明治天皇の生涯は、その一節ごとに劇的な要素をはらんでいる。さらに彼の死は、日本の社会に深甚な影響を与えた。当時の日本人が受けた打撃を、われわれはいまなお、彼らの書いたものからうかがうことができる」(『明治天皇伝』への熱烈探求、『新潮45』昭和六〇年五月号)。

(10) 隅谷三喜男著『大日本帝国の試練』(日本歴史22)中央公論社、昭和四一年、二四七―二五二、二五七―二五八頁、など。なお、欧米列強に対して、初めてアジアの小国日本が勝利を得たことは、近代世界史上画期的なことであった。そしてその後の世界に様々な影響を与えた。

(11) 拙著『天皇研究』、二一九―二二頁。たとえば、「仁慈の精神」について、皇太子殿下の教育にあたっていた故小泉信三氏は、美智子妃殿下に対して、皇室に身を置く者の心得を、つぎのように語ったと伝えられている。すなわち、「皇室の伝統的精神は仁慈にある。皇室は政治に関与しないが、どんなに政治がよくても必ず不幸な人がいる。病めるもの、貧しいもの、孤独なものにとって、皇室はまず第一の同情者であるべきだし、歴史、その精神できた。このことを深く心にとどめていただきたい」(浜田寛著『浩宮さまの教育十年』勝利出版、昭和四五年、二二―二二頁)。なお『広辞

苑』(岩波書店、昭和四五年版)は、「仁慈」について「いつくしみめぐむこと。なまげ。仁愛」と説明している。

(12) 明治天皇の御製総数は約十万首といわれている(注(6)の拙論参照)。そして最も多い時は一日に一六〇首も詠まれたという(『萬象録―高橋箒庵日記(巻1)―』思文閣出版、昭和六一年、三六頁)。特に本論で問題にする日露戦争の始まった明治三十七年は、七五二六首もあり、毎日平均二〇〇首強作成されたことになるという(つぎにあげる御製集の解説による)。つまり明治天皇の御製は、明治天皇の思想・心情を直接うかがうことのできる唯一の資料であり、いわゆる「日記」の代わりをなす重要な資料であると考えられる(注(6)の拙論)。ところで、約十万首中、その一割に近い約九千首が、昭和三十九年明治神宮より『新輯 明治天皇御集』上下二巻として発刊された。

本論は右書に発表された御製を中心に考察していく。

(13) 肥後和男編著『歴代天皇紀』秋田書店、昭和四八年、五八八頁。

(14) なお徳富蘇峰氏は、明治天皇の御製についてつぎのように述べている。「天皇が本来の平和愛好家であらせられたる事は、云ふまでもなく、其の目的が万邦協和であったことは勿論、天皇の一切は悉く、御製集を見れば明白である。天皇の御製は、花鳥風月に止まらず、殆んど摠てが、天皇の胸臆を自ら語り玉うたる所にして、ローマの賢帝マルクス・アウレリウスの瞑想録に比す可きものであり、此れを捧読すれば、天皇の御心胸は鏡にかけて見るが如きものである」(徳富蘇峰著『三代人物史』読売新聞社、昭和四六年、二八頁)。また作家池波正太郎氏は、「年々に思ひやれども山水の汲みて遊ばん夏なかりけり」そういう御製があるんですよ。毎年毎年、山へ行って清水を汲んで遊びたいと思ひながら、そういう夏はない、と。国務にそれだけ打ち込んでいるわけですよ。これはねえ、一般のわれわれと違って嘘をついたり自分を飾ったりしないんだよ、天皇は。本心をいっているんだよ。……今の天皇の歌もそうですよね。優れた名歌とか何とかいうんじゃないけど、やっぱり俗人じゃ詠めない歌ばかりですよ。「明治天皇御製」というのが出ているだろう、どこかの文庫で、たまには、ああいうものを読むといいんだよ、いまの政治家は……。」と述べている(池波正太郎著『男の系譜』新潮文庫、昭和六〇年、四八六―四八七頁)。

(15) 『新輯 明治天皇御集』上、五九七頁。

(16) 同右下、七三一頁。

- (17) 明治天皇の父君である第一二二代孝明天皇にも、やはり同様な心情を詠まれたつぎのような御製がある。「朝な夕な民のかまどのにぎはひをなびく煙におもひこそやれ」(『皇室文学大系』第三輯、名著普及会、昭和五四年覆刻、五九九頁)。
- (18) 筑波常治著『明治天皇』角川新書、昭和四二年、一三九―一四八頁。
- (19) 同右、一四八頁。木村毅著『明治天皇』至文堂、昭和三年、四―五頁。小西四郎編前掲書、二九一―二九二頁。
- (20) 渡辺幾治郎著『明治天皇』上巻、明治天皇頌徳会、昭和三年、二七―二八頁。
- (21) 肥後和男編著前掲書、六一五―六一六頁。
- (22) 『新輯 明治天皇御集』上、五四六頁。
- (23) 同右下、一一七二頁。
- (24) 注(14)参照。
- (25) 渡辺幾治郎著前掲書上巻、三六頁。
- (26) 肥後和男編著前掲書、五九一頁。
- (27) 豊田稜『明治天皇』(『明治天皇と元勳』《日本のリーダー第一巻》、TBSブリタニカ、一九八二年、三〇、四八―五四、五九頁)。藤村道生著『日本現代史』《世界現代史1》山川出版社、二五頁、など。
- (28) 『新輯 明治天皇御集』下、七二七頁。
- (29) 同右、七八三頁。
- (30) 筑波常治著前掲書、四五頁。明治神宮編著『明治天皇詔勅謹解』講談社、昭和四八年、一〇八六―一〇九九頁。
- (31) 『新輯 明治天皇御集』上、六三八頁。
- (32) 同右下、一〇九三頁。
- (33) 拙論「日本人の道徳的特質に関する一考察(上・下)」(『麗澤大学紀要』第三十九巻、昭和六〇年七月。同第四十巻、昭和六〇年十二月)参照。
- (34) 注(3)の拙論参照。
- (35) 『新輯 明治天皇御集』下、八七三頁。
- (36) 同右、一一七四頁。
- (37) たとえば、隅谷三喜男著前掲書、四―六頁。
- (38) 『新輯 明治天皇御集』上、六三二頁。
- (39) 同右、六三八頁。
- (40) 藤村道生著前掲書、三八―四〇頁。島海靖著『明治』をつくった男たち『PHP研究所、昭和五七年、二二―三―二二四頁。小西四郎編前掲書、一一八―一九頁。
- (41) 木村毅著『明治天皇』新人物往来社、昭和四九年、一五一頁。
- (42) 同右、一六三頁。
- (43) 同右、一六四頁。『明治天皇と元勳』七三―七六頁。木村毅著『明治天皇』至文堂、七、二二七―二三二頁。渡辺幾治郎著前掲書下巻、一二四―一三三頁。入江相政『明治天皇』(日野西資博著『明治天皇の御日常』新學社教友館、昭和五年の「付録」)。筑波常治著前掲書、一〇七、一七四頁。家永三郎著『新日本史』富山房、昭和二年、二五〇頁。
- (44) 牛島秀彦著『ニッポン帝王学』潮出版社、昭和五二年、一〇二頁。小野昇著『天皇記者三十年』読売新聞社、昭和四八年、二九三―二九四頁。
- (45) 『新輯 明治天皇御集』上、六五〇頁。
- (46) 同右下、七〇五頁。
- (47) 木村毅著『明治天皇』至文堂、三頁。
- (48) 『新輯 明治天皇御集』上、六三三頁。
- (49) 同右下、六八四頁。
- (50) 渡辺幾治郎著前掲書下巻、一三八―一四〇頁。
- (51) 『新輯 明治天皇御集』上、六四七頁。
- (52) 同右下、七三五頁。

- (53) 筑波常治著前掲書、一七九―一八二頁。渡辺茂雄著前掲書、三〇五頁。
- (54) 筑波常治著前掲書、九―一〇頁。
- (55) 『新輯 明治天皇御集』上、六三四頁。同右、六五五頁。
- (56) 筑波常治著前掲書、二〇七―二〇九頁。渡辺茂雄著前掲書二〇五頁。
- (57) 『新輯 明治天皇御集』上、六三七頁。
- (58) 同右下、八一―二頁。
- (59) 同右、六五〇頁。
- (60) 同右、八〇七頁。
- (61) 渡辺茂雄著前掲書、二六〇―二六一頁。渡辺幾治郎著前掲書上卷、三二二頁。木村毅著前掲書 至文堂、一頁、など。
- (62) 渡辺茂雄著前掲書、二四八―二四九頁。渡辺幾治郎著前掲書下卷、一五九―一六〇頁。小島政二郎『俺伝』幕ひき』(『週刊新潮』昭和五四年八月二日号)。
- (63) 渡辺茂雄著前掲書、二六〇―二六一頁。木村毅前掲書、至文堂、七―八頁。
- (64) 渡辺茂雄著前掲書、二六〇頁。渡辺幾治郎著前掲書下卷、一五七―一五九頁。『明治天皇と元勳』、五七頁。木村毅著前掲書、新人物往来社、一五九頁。網淵謙銳著『遠い記憶』文春文庫、一九八七年、二二―一頁。
- (65) 小野昇著前掲書、二九四頁。
- (66) 『新輯 明治天皇御集』上、六五五頁。同右、七三二頁。
- (67) 渡辺茂雄著前掲書、二五三―二五四頁。
- (68) 渡辺茂雄著前掲書、二五三―二五七頁。渡辺幾治郎著前掲書下卷、一六八―一七〇頁。
- (69) 『新輯 明治天皇御集』下、七三四頁。同右、一〇三三頁。

- (70) 同右、八〇〇頁。
- (71) 同右、八九五頁。
- (72) 同右上、六三七頁。
- (73) 同右下、一〇八四頁。
- (74) 同右上、四六九頁。
- (75) 同右下、七二三頁。
- (76) 渡辺茂雄著前掲書「まえがき」。
- (77) 『新輯 明治天皇御集』下、七〇六頁。同右、一〇九〇頁。
- (78) 筑波常治著前掲書、二六頁。杉森久英著『明治天皇』中央公論社、昭和六一年、三九―四〇頁。
- (79) 筑波常治著前掲書、一一―一二頁。
- (80) 『新輯 明治天皇御集』下、七八―一頁。
- (81) 筑波常治著前掲書、八八頁。同右、九一頁。
- (82) 『新輯 明治天皇御集』下、一〇八四頁。同右、一〇九二頁。
- (83) 栗原広太著『人間明治天皇』駿河台書房、昭和二八年、一四六―一五〇頁。
- (84) 「おのが身はかへりみずして人のため つくすぞひとのつとめなりける」(明治42年、『新輯 明治天皇御集』下、一〇三〇頁)。
- (85) 筑波常治著前掲書、一九七頁。
- (86) 『新輯 明治天皇御集』上、五四―三頁。
- (87) 同右、八九四頁。

(94) 同右、一〇三一頁。
広池千九郎著『道徳科学の論文』、一九二四―一九三二頁。注(5)の拙著第二章。